落鮎

丹羽文雄作

落鮎

丹羽文雄

落

鮎

昭和二十四年七月十日　印刷
昭和二十四年七月十五日　發行

定價　二五〇圓

著者　丹羽文雄
東京都千代田區丸ノ内二ノ二
發行者　栗本和夫
東京都豐島區高田南町一ノ三五七
印刷者　正木正家

東京都千代田區丸ノ内二ノ二
丸ノ内ビルディング五九二區
發行所　中央公論社
電話（23）五三五・五三六番
丸ノ内　五三七・五三八番
振替口座　東京三四番

（毛利製本）

落

鮎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

1

二階正面の席につくやいなや、舞台のボックスから音樂が湧き上り、緞帳がするとあがつた。場内の騒々しさが吸ひとられて鎮まつた。舞台はスペインの街の風景だが、二階から見下すせゐか、舞台の奥行が浅く、埃つぽくて、お粗末な印象である。小峰烈は端正にソフトを膝にのせ、舞台に向かつてゐた。小鬢に白髪をまじへる彼は、どの踊子が杉杉子であるかと、隣席の章(あきら)に尋ねるやうな眞似はしたくないと思つてゐる。杉杉子が、自然と判るといふ氣がした。章が結婚

したいといふ相手である。父親の自分に、相手の踊子が自づと判るといふ神祕じみた暗合も、また許されてゐるやうに思ふ。左手から踊子が数名、同じ衣裳で唄ひながら登場した。右手から、ちがつた衣裳の女達が、唄ひながら舞台のまん中でゆきちがつた。

「どの子でせう。あの中にゐるのでせうか」

左の席にゐる昌代が、肩を押しつけて、小峰に囁いた。小峰は小さく頸を振つた。それとなく右隣を見ると、章が少年じみた動搖を示して、からだを二つに折り、胸の下で腕を組んで、何かに耐へる姿勢にあつた。舞台に杉杉子が登場してゐるかのやうな思ひつめ方であつた。

一人の女が、舞台中央のバルコニーから唄ひながら現れた。端役ではない。小峰はどきつとなつた。が、ちがふやうな氣がする。

「あの人？」

昌代が再び訊く。頸を振つて應へる。まるで小峰烈が、杉杉子を知つてゐるかのやうな否定の仕方であつた。長男の妻となる女は、もつと美しい人だと、長男に味方する盲ひた思ひがしきりと動いた。そのくせ、長男からもち出されたこの話には、小峰は事後承諾を強ひられた形であつた。劇場にのぞむまでには、手きびしく品定めしてやらうと、杉杉子の欠点をさがし出すことに意地悪な情熱すら抱いてゐた。生活環境がまるでちがふ。自分は、氣に入らないにちがひない。それが、いつか変化してゐた。小峰は、白紙になるべきだと努めた。白紙で、杉杉子を眺めたいと願ふ。章に対するいちばん素直な父の態度である。これだけの心の変化すら本人には意外であつた。何がかく仕向けたのか。章が思ひあまつて舞台を見つめてゐる熱心さに、ほだされたためか。父親の最後の審判を迎へるわが子のいぢらしさのためだつたか。いづれも違ふやうである。彼は昌代の人の悪い好奇心に張り合つてゐる。それから章を少しでもかばひ立てようとする微妙な利

己的な思惑が去來した。彼も劇場にはいるまでは昌代と同じ心であつたことは否定出來ない。昌代の辛辣な批判では、初めから結果が判つてゐた。昌代の批判には、情容赦がない。親らしく章の心の側に立つてやるといふ思ひやりは、露ほどもない。ないので、あたり前であつた。あれば、嘘になる。小峰は、昌代の二十八歳を感じた。

「スターですのね。だからなかなか登場しないのでせう」

「役柄が限定されてゐるから、さういふ舞台でないと現れないのだらう。唄つたり、芝居をする子ではないさうだ」

「何んだか、じらされてるみたいで……」

衆人の中で昌代と隣合つて腰かけると、二十八歳と並んでゐるやうな氣がする。二十八歳の觀念につまづく。膝がふれてゐるといふわけではなかつた。一定の間隔は保たれてゐるが、鮎が身をふるはせて急な瀬をのぼる時のある緊縛した

若さが感じられる。傍若無人な、かちつと固い果実である。それにしても、若し昌代が母親であつたならば、自分以上に章に味方し、見ない内から杉杉子に厚意を示すにちがひないと、この場合、母親の分まで引きうけた自分を、小峰は皮肉に感じる。舞台は歌劇といふよりも歌謡曲風に自在に換骨奪胎されてゐるが、筋は想像することが出來た。その内に、杉杉子の登場となるわけである。主役はほとんど出てゐる。杉杉子は、思ひがけない役にちがひなかつた。

舞台は酒場の場面になつた。裾の長い、色とりどりの女達が唄つたり、踊つたりした。俄かに場内から拍手があがつた。どよめきが起つた。左手から裸体の女が、はしり出た。全身にぴつたりと合つた薄いものをつけ、顔が判らない。彼女は牛の面をかむつてゐる。可愛い角をつけてゐた。彼女が一種独特な踊りをはじめると、舞台は忽ち彼女の一点に凝集された。女達は彼女をとりまいた。彼女はひとりで踊つた。跳ねたり、両手をあげて舞つたり、脚を曲げたり、腰を歪めた

り、その踊りは全身から湧き上るリズムに憑かれたやうに見えた。音樂は彼女にひきまはされて聞えた。この踊りは、舞台を二倍の廣さに感じさせた。

小峰は、ちらりと章を見た。章は両手を握つて、舞台にのめりこむやうに凝視してゐる。小峰は、苦笑を浮かべた。それが杉杉子であると氣が付いたのは、踊りはじめて、踊りの中の異樣な情熱、速度、形、抑揚に心をとらへられた瞬間である。彼はしきりと歪曲と飛躍を聯想する衝動をうけた。踊りそのものは、それほどをかしくなかつた。小峰はよろづにつけ、直感に訴へる場合、をかしいか、をかしくないかで本物か二流かの区別をつけた。名人藝を聞いてゐても、をかしく感じる場合がある。をかしくなければ、それはもうそれだけで立派である。絵を見ても、音樂を聞いても、芝居を見ても、をかしいといふ印象をあたへるものは、一流ではなかつた。杉杉子の踊りは、それほどをかしくなかつた。日本人にはめづらしく腰が高くついてゐる。闊達自在に踊りまくるが、己の魅力を十分に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

知つてゐる小づらにくさもあつた。日本の女の裸も、あそこまで踊れるのだといふ感じだつた。

「いいからだですわ。ひとりで舞台を押へてしまつて……あの人でせう？」

昌代が、顔を寄せた。頷く。が、長男の嫁として目鏡にかなつたといふ意味ではなかつた。言はば、一個の藝術品である。をかしくない踊りが、人間性に何かを與へたといふ鑑賞の問題であつた。小峰は、章の妻としては考へてゐなかつた。牛の面をかむつてゐるではないか。

拍手に送られて、彼女は舞台から消えた。牛の踊りだけが、杉杉子の持役である。乳臭い歌謠劇の中で、彼女の踊りだけが大人だつたといふ印象を小峰はうけた。

陽はまだ空にあつた。小峰と昌代は、銀座に向かつて雜沓を歩いてゐた。長身な小峰は、いつも黒つぽい服を着てゐる。英國風の紳士の型である。昌代が軽く

小峰の腕に手をかける。外出の彼女の洋裝は、どこかショウウインド的であつた。生活感覚がとけこんでゐない。家庭にゐる時の方が、はるかに巧みに着こなしてゐるが、どちらかといへば、和服の方が似合つた。

「踊子を奥さんに迎へるといふことは、小峰家にとつて大冒險ですわね。章さんも、いい時代に生れていらしたわ。よく中野が承知しましたわね」

「自分らの昔を思ひ出したからだらう。親のいひつけで嫁してきたことが、どんなに不自然で、非人間的かと、骨身に應へて味はつてゐるからだらう」

通りに面した西洋料理店に、よつた。昔の資生堂を思はせ、上品な靜かさが室内に漂つてゐた。猪熊弦一郎描く模様化された裸婦が、壁間をかざつてゐた。銀座に出ると、小峰はひとりの時もここに寄ることにしてゐた。室内は氣に入つてゐるが、窓外はいけない。銀座の台所をのぞくやうで、表付きだけ立派で、裏へまはると、舞台裏さながら索莫すぎる。

「やがて來る頃だが」と、小峰は腕時計の袖口を直した。「普通の客に呼ばれて來るのでないだけに、彼女も緊張するだらう。惡い印象を與へまいとして……しかし、すでに舞台で、彼女の裸同様の正体を見てゐるのだから、この上は、如何にそれを粧つてゐるかといふことを、確かめるだけだが、……二十歳だからね」

「踊子といへば、とかくの噂がありますけれど、あのからだからうけた感じでは、生活も健康なやうですわね」

「僕も、さう感じた。あれも一つの藝だから、舞台に立てば、人間がちがつたやうに立派に踊れるといふことはあるが、不健康な生活をしてゐると、踊りの間で、微妙にそれが感じられるからね。あの子は、見るからに生氣潑剌として、わるびれず、闊達自在に踊つてゐたが、濁つた経驗のない強さを感じた。あの人の踊りは、濁つたものを健康なものに変化させる力をもつてゐる。こんな批評はをかしいが」小峰は間を置いて、微笑をうかべた。「息子の嫁を、かうして品定めする

年齡にいつか自分がなつてゐたといふことは、感慨無量だ。若いつもりでゐるが」
「あたしは、章さんと同じ年齡ですわ」抗議の眼差である。
「うん、君は若い」その顏をまじまじと見やつた。「二十三四だ。君の若さは、鏡が反射するやうだ。一抹の翳りも許さないでみんな反射してしまふ明るい若さだ。八つの子供があらうとは思へない。お世辭ではない」
「いまさらあなたにお世辭をいはれても、嬉しくありません」
「君の若さのため、ついふらふらとこちらまで、若いやうな錯覺にとらはれてゐたのだ。ありがたい錯覺。章らに逢ふと、いつも氣持が老けて、いけない」
二人は、サンドウイッチを行儀よく食べた。そこへ、章と杉杉子が階段を上つて來た。章は上りきつたそこから、室內を見渡したが、派手な昌代の顏がすぐ目についた。二人が近付いたと知つた時、小峰は外國流に立ち上つてゐた。
「父」と、小さく言ひ、「杉さんです」振分けた。

「先程、あなたの舞台を拜見しました」
章は、昌代を紹介する時に、
「岸さんです」
昌代の姓を言つた。不断、章は岸さんと呼んでゐた。昌代は苦い棒をのみこんだ顔になつた。そのため、杉杉子にお世辞をいふ氣がなくなつた。昌代は正面にかけた杉杉子を、無遠慮に眺めやつた。美貌とは言へなかつた。そこらにいくらも見かける平凡な娘の顔である。あれほどの見事な体格も、服で包まれると、單に大柄な、どこか垢抜けのしない感じを與へる。このひとの一番美しい時は、裸だと思ふと、昌代は微笑を禁じ得なかつた。南洋でないのが、残念である。じろじろ見られてゐると思ふと、杉子もつい、昌代を氣にしないわけにはいかなかつた。人みしりしない杉子は、昌代の顔に眸を置く。路傍の人を見るやうであつた。昌代のうけ唇が、第一の印象だつた。細面、瞳が大きかつた。長い睫毛であ

る。眉が濃い人は、氣性もしつかりしてゐるといふ。長くて、きれいな指を昌代はもつてゐた。杉子は、羨しいと思つた。神經質らしい。病的なほどの身ぎれいな感じである。襟足には、一本の乱れ毛もない。塗つたやうに、細い襟足が青白い。髪床から出てきたやうな髪型には、或る種の職業女の習性を聯想させるのである。さういへば、ドレスの着工合も、普通人とはどこか違つてみえた。杉子は章から、岸昌代の生れについては、くはしく聞いてゐなかつた。

「家庭人になつたら、舞台はやめると言つてますよ」

章が言ふと、杉杉子が頷いてみせた。

「それは惜しい。あれだけの踊りを犠牲にするのは、惜しいですね。もつとも結婚生活も、考へやうによつては、大事業ですから」

「舞台人で家庭をもつてゐる人をいく人か知つてをりますけれど、大抵どちらかが犠牲になつてをります。あたしは、それほど大決心で舞台に立つたのとは違ひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo